様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６７０７

研究課題名（和文）文学におけるアイルランド南北分割の総合的研究

研究課題名（英文）A Study of the Impact of Irish Partition on Ulster Literature

研究代表者
中村　仁美（Nakamura, Hitomi）

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：１０７３９２１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　イースター蜂起から100周年を迎え、アイルランド文学・文化研究においても第一次世界大戦、独立戦争、内戦といった激動の20世紀前半が顧みられる風潮にある。本研究はとりわけ、北東部アルスターにゆかりある作家の作品における南北分割および国境制定の影響について論究した。取り上げた作家は、Patrick Kavanagh、Benedict Kiely、Michael McLaverty、Sam Hanna Bellである。彼らの著作を横断的に読み解くことで、当時の「アイルランド文学」と「イギリス（北アイルランド）文学」の狭間のグレー・エリアを照射し、部分的にではあるがその特質を前景化することができた。

研究成果の概要（英文）：　This study has reconsidered literary works published in early twentieth-century Ireland, with a special interest in the impact of Irish partition and the imposed border in Ulster. Key texts of Patrick Kavanagh, Benedict Kiely, Michael McLaverty and Sam Hanna Bell are included for discussion.
Gray areas remain in the modern history of Irish and Northern Irish literature; this study illuminated these liminal spaces in a way that foregrounds the complicated literary milieu of the time.

研究分野：アイルランド文学、英文学

キーワード：アイルランド文学　北アイルランド文学　アルスター　国境地帯　文学と場所

１．研究開始当初の背景

2016 年、アイルランドはイースター蜂起から 100 周年を迎えた。第一次世界大戦、アイルランド独立戦争、内戦が顧みられる風潮のなか、アイルランド文学・文化研究においてその記憶の形象が複雑な「場所」がある―1920 年代から 1949 年にかけて「分割」が既成事実化していった、北東部アルスターである。いわゆる 17 世紀の「アルスター植民」から今日に至るまで、この地方の文学はプロテスタント系住民／カトリック系住民、ユニオニスト／ナショナリストといった、宗派や政治思想の異なるコミュニティの対立や共存の歴史と対峙してきた。

ボーダー・スタディーズも確立されつつある昨今、文学という人間の想像力の営みに「場所」や「境界」がもたらす意味は、アイルランドにおいても重要な問いである。とりわけ南北アイルランド国境の特異性は、Joe Cleary の言葉を拝借するならば、「国民投票ではなく、英国政府の思惑に沿い、宗派と政治思想のバランスによって決められた」国境であるということだ。アルスター（伝統的には 9 州）のうち、プロテスタント系が過半数であった 6 州が「北アイルランド」としてイギリスに残留したこと、そしてそれに付随した南北分割は、1960 年代後半に始まる北アイルランド紛争の遠因となったことはよく知られている。

しかしながら、Seamus Deane の *A Short History of Irish Literature*（1986）をはじめ、アイルランド文学史を概観する文献が、南北分割が当時の北部の作家たちにもたらした影響にまで踏みこむことは少ない。木村は 20 世紀前半のアイルランド文学史について、二つの大戦に象徴されるように「大変動の時代」であったとまとめている。散文では主に James Joyce や Samuel Beckett といったモダニスト、そして Liam O’Flaherty、Sean O’Faolain、Frank O’Connor など、独立戦争や大戦の経験を共有した作家の二派に大きく分けて記述されることが多い。詩や演劇では William Butler Yeats の功績や、彼が Lady Gregory らと先導したアイルランド文芸復興運動がよく知られている。

他方で、異類混淆そのものがエトスであるアルスターの文学の議論は、相当な複層性やしがらみを持つ。本研究は、南北分割の影響という観点から、当時のこの地方の文学的動向を整理し、再考したいという動機に基づくものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、アイルランドが独立へと歩んだ 20 世紀前半のアルスターの文学における南北分割と国境制定の影響を明らかにすることであった。

「場所」や「国境」をめぐる人々の共存と対立の記憶、そして南北分割のドラマと現実を映す文学作品の数々には、文学史が長らく見過ごしてきた個性や特質があるのではなかろうか。20 世紀前半という激動期が顧みられる風潮のなか、「アイルランド文学」と「イギリス（北アイルランド）文学」の狭間のグレー・エリアを照射し、文学史に新たな一面を提示することが、本研究が目指す最終到達点であった。

３．研究の方法

萌芽的な研究課題であることは否めないため、具体的な研究プロセスを以下のように定めた。

第一段階として、南北分割が既成事実化していった動乱期のアルスター、もしくは国境地帯の様相を描いた作家を調査し、その文筆活動を整理した。カトリック系／プロテスタント系などの宗派や出自を問わず、アルスターおよび国境地帯にゆかりある作家の伝記的事実、創作活動、作品の主題などをまとめてマッピングし、論究の基礎を築いた。

第二段階として、これら作家の作品における南北分割の表象を読み解き、作家もしくは重要な作品ごとに論究に取りかかった。これまでの研究代表者自身の予備的研究成果を更新および補填する目的で、国内外の学会や研究会で研究発表を行った。そこで得られたフィードバックを基に、学術論文の発表や諸学会の会報への寄稿などを行った。

同時に、当初の研究計画通りの図書や備品の購入、そしてアイルランドと北アイルランドでの調査（資料収集、論文執筆、現地研究者との面会）を行い、研究活動を進めた。

４．研究成果

2015 年 4 月から三年間にわたり取り組んだ本研究課題関連の成果は、雑誌論文 2 件、学会発表 7 件、図書（論集）1 件、その他（学会会報記事など）4 件である。

（１）2015 年度の研究成果

研究の基盤作りに励んだ年であった。まず、岡山英文学会 38 回大会にて「辺境者としての Patrick Kavanagh」と題した発表を行った。20 世紀半ばのアイルランドを代表する詩人 Patrick Kavanagh の「場所の感覚」の変遷を作品から読み取り、モナハン州国境近郊というその出自と南北分割の動乱が創作に与えた影響を明らかにした。

また、12 月に刊行された渋谷和郎・野村忠央・土居峻編『英語と文学、教育の視座』に、拙稿「サム・ハンナ・ベルと『十二月の花嫁―アルスターへの眼差し』」を発表した。本稿は、日本英文学会中国四国支部第 67 回大

会（2014年）にて行った研究発表に加筆修正した内容である。グラスゴーに生まれ、北アイルランドで活動した作家 Sam Hanna Bell の *December Bride*（1951 年出版であるが、物語の舞台は 20 世紀初頭のストラングフォード湖畔）に関する作品論である。

（２）2016年度の研究成果

全体として、研究成果の発表に努めた年であった。まず、国内外の学会での研究発表を 4 件行った。5 月には、国立台北科技大学で行われた Forgotten Books and Cultural Memory にて、“‘The peculiar fractures in our history’: Irish Partition Depicted by Ulster Writers of the Time”、7 月には立命館大学英米文学会第 26 回大会にて「Benedict Kiely と南北分割―*Land Without Stars* を読む―」、8 月には ESSE (The European Society for the Study of English) Galway 2016 にて “‘Nearly a mile from home yet foreign country’: Patrick Kavanagh and Ulster Politics”、9 月には欧米言語文化学会関西支部設立 20 周年記念特別例会にて「混迷する『場所の感覚』―南北分割とアルスターの作家たち―」と、それぞれに作家、作品、焦点の異なる内容で発表を行った。

これら研究発表の内容もふまえつつ、年度末には学術論文を 2 件発表した。Benedict Kiely については『立命館英米文学』に「Benedict Kiely と南北分割― *Land Without Stars* を読む―」、Patrick Kavanagh については日本アイルランド協会の『エール』36 号に「パトリック・カヴァナと『アルスター』」を発表した。Benedict Kiely については創作初期の 1940 年代、Patrick Kavanagh については 1930 年代から「教区主義（parochialism）」に至る 1950 年代までの作品における南北分割の影響を論じた。

二年目ということもあり、今後の研究活動への布石として、所属学会の会報に積極的に寄稿した。「大分県アイルランド研究協会会報」第 32 号に、「故郷と国境をめぐって―作家たちのメモワール―」、そして「日本アイルランド協会会報」第 96 号に「湖のアルスター」と題した文章を寄せた。

（３）2017年度の研究成果

研究課題の発展のため、次なる課題への橋脚を据えることに尽力した年であった。国内の学会や研究会での研究発表を 2 件行ったほか、会報記事を 2 件執筆した。

まず、第 40 回関西アイルランド研究会にて「アイルランド文学と『場所』―パトリック・カヴァナの世代をめぐって―」とする研究発表を行った。20 世紀後半より見られた、アイルランド文学における「場所」の議論の萌芽、および Patrick Kavanagh 世代の作家たちの「場所」意識の問題を改めて整理することができた。

南北分割後もベルファストで活動を続けたカトリック系の作家である Michael McLaverty については、日本アイルランド協会第 25 回アイルランド研究年次大会にて、「マイケル・マクラヴァティと『場所』― *Call My Brother Back* を中心に―」という題目で発表した。こちらの内容に関しては課題も残るため、論考に興す際には精度を高めていく所存である。

また、2017 年は Patrick Kavanagh の没後 50 周年であった。これに関連し、「大分県アイルランド研究協会会報」と「日本アイルランド協会会報」（共同執筆）にそれぞれ寄稿した。

総じて、以上の成果を通じ、アルスターにゆかりある作家の作品における南北分割と国境制定の影響について考察することができた。学術論文発表に至った作家は Patrick Kavanagh、Sam Hanna Bell、Benedict Kiely の三名である。著作を読み進めるごとに新たな発見があり、洞察を深めることができたのは収穫であった。しかしながら、資料不足などにより、当初の企図から逸れ、論文執筆にまで至らなかった作家も存在する。

ベルファストのカトリックというマイノリティの環境におかれ、文筆活動を続けた Michael McLaverty については、今後も考察を続けたい。彼の代表作 *Call My Brother Back*（1939）は、実際の分割、北アイルランド議会開設の場面、そしてその影響による近親者の死を含む、現実との地続きの感覚が強いフィクションである。本作に関する拙稿の発表が、目下課題であると考えている。

＜引用文献＞

Cleary, Joe. *Literature, Partition and the Nation-State: Culture and Conflict in Ireland, Israel and Palestine.* Cambridge: Cambridge UP, 2002. 98.

木村正俊編『アイルランド文学　その伝統と遺産』、開文社、2014、19.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①中村仁美、「パトリック・カヴァナと『アルスター』」、『エール』、査読有、36 号、2017、65-80.

②中村仁美、「Benedict Kiely と南北分割―*Land Without Stars* を読む―」、『立命館英米文学』、査読有、26 号、2017、21-33.

〔学会発表〕（計 7 件）

①中村仁美、「マイケル・マクラヴァティと『場所』―*Call My Brother Back* を中心に―」、日本アイルランド協会第 25 回アイルランド研究年次大会、2017 年.
②中村仁美、「アイルランド文学と『場所』―パトリック・カヴァナの世代をめぐって―」、第 40 回関西アイルランド研究会、2017 年.
③中村仁美、「混迷する『場所の感覚』―南北分割とアルスターの作家たち―」、欧米言語文化学会関西支部設立 20 周年記念特別例会、2016 年.
④Nakamura, Hitomi、"'Nearly a mile from home yet foreign country': Patrick Kavanagh and Ulster Politics"、ESSE (The European Society for the Study of English) Galway、2016 年.
⑤中村仁美、「Benedict Kiely と南北分割―*Land Without Stars* を読む―」、立命館大学英米文学会第 26 回大会、2016 年.
⑥ Nakamura, Hitomi 、"'The peculiar fractures in our history': Irish Partition Depicted by Ulster Writers of the Time"、Forgotten Books and Cultural Memory: A Conference Hosted by the English Department at Taipei Tech、2016 年.
⑦中村仁美、「辺境者としての Patrick Kavanagh」、岡山英文学会第 38 回大会、2015 年.

〔図書〕（計１件）

①中村仁美、『英語と文学、教育の視座』、DTP 出版、2015、342（63-74）.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
中村　仁美（NAKAMURA, Hitomi）
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号：10739212

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)